

2022第19回JSCAクィーンズランドスイミングチャンピオンシップ 遠征報告書

報告：副団長 鈴木 晶等
(関東ブロック)

遠征日程：2022年12月7日(水)～17日(土) 10泊11日
12月7日(水)～8日(木)



3年ぶりとなる本年はコロナ禍により飛行機便が減便となり、競技開始3日前に日本を出発。帰国は競技終了翌日早朝に出発となる。通常の遠征ではオーストラリア到着日の午前中に観光・午後練習、次の日から大会が始まり競技終了翌日に1日観光が入る遠征行程となるのだが、今回はそうはいかず、非常にあわただしく、選手・引率担当には厳しい行程だったと思う。12月のオーストラリアは夏場のため、コロナ感染防止と熱中症対策を同時並行で進める必要があり、今回は引率メンバーのコーチ1名を減らし、ドクターに帯同してもらった。選手12名(本部選抜8名・近畿支部選抜4名)、と引率8名(団長・副団長・ヘッドコーチ・サブヘッドコーチ・近畿支部支援コーチ・ドクター・コーディネーター・シャペロン)による遠征陣となった。7日夕刻前に成田空港に全国各地から集合し、夜オーストラリアに出発、8日朝に現地に到着した。





午前中はゴールドコーストに立ち寄り、午後は練習。9日はまだ試合会場での練習ができないためゴールドコーストアクアテックセンターの長水路4レーンをレンタルし、練習をした。運よくオーストラリアのトップ選手達との交流も実現した。選手たちは物怖じすることなく積極的に交流。

12月9日（金）

午前中はコアラを抱っこできる公園を観光し、午後から試合会場にて前日練習。選手同士は早い段階で打ち解けており、緊張感や孤独感でガチガチとなるようなことはなかった。体調不良者が出なかったのも幸いである。



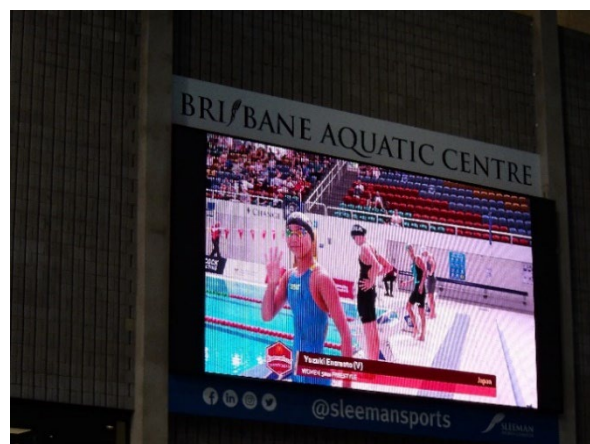
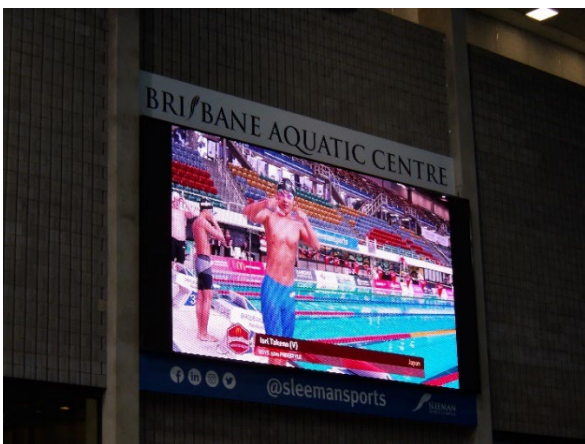
12月10日（土）～16日（金） ブリスベーンアクアテックセンター

いよいよ、大会が始まる。初日は14歳以下の男女メドレーリレーと男女フリーリレー。12歳の選手が混ざるも男子は2冠、女子1冠。女子は残念ながらメドレーリレーで失格となるが、こうした失敗が後の成功に繋がると考える。

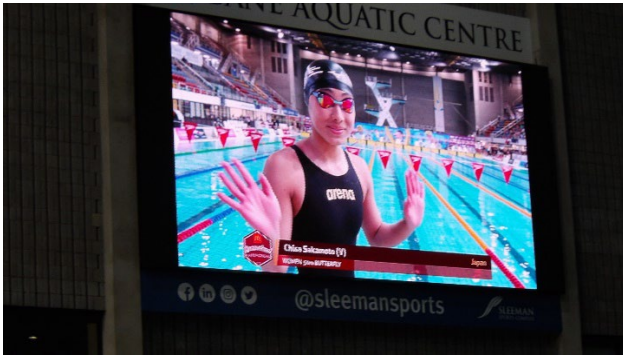
次の日から個人戦。海外からの参加選手はタイムが良くても2位までしか決勝に出られないため、本遠征団の中でも2枠を巡る争いが起きる。ライバルであり、チームメイトの選手たち。自己ベストを出したい気持ちや誰にも負けたくない気持ちと選手がどう向き合うか、大変良い経験だったと思う。チーム内で2枠に入れなかった選手も決勝では応援をしっかりとっていた。悔しいながらも気持ちの切り替えが出来ていたように思える。その背景には選手達同士の仲が良かったことと、引率団との距離感が挙げられる。今回の遠征では、団長・副団長はどちらかというと裏方にまわり、主体的に選手を引っ張っていたのは3名のコーチだった。この3名のコーチが頭ごなしに「ああしろ、こうしろ」と言うのではなく、選手に考えさせ、勇気づける言葉をかけ、選手の自主性を信頼し、その成長を促そうとしているのがすごく感じられた。これはなかなか忍耐力がいることなのだが、見事、選手がそれに答えていたように感

じた。また、ドクター、シャペロン、コーディネーターの存在も忘れてはならない。ドクターとシャペロンは選手たちにしたら母親ぐらいの年齢ということもあるのだろうか、選手の表情を良くみており、フォローを忘れない。一緒に喜んであげ、一緒に泣いてあげる。選手たちに大きな安心感をもたらしていた。そしてコーディネーターの活躍も素晴らしかった。日本では大学の水泳部を見ているという異質な経歴を持つ彼は、様々なところで気をくばり、問題を解決していった。選手のみならず引率団からも絶大な信頼が寄せられていた。こうした引率団の素晴らしい気づかいにより、早い段階でこの遠征団は「チーム」として結束し、前進することが出来た。

その結果、選手全員がメダルを手にすることが出来、ベストタイム数も 58/147 と、選手を預かった責任を果たすことが出来たと自負している。



表彰式でも満面の笑顔！決勝時の選手紹介ビジョンにもパフォーマンス！



ビジョンの掲示も本格的！



主な競技結果

- 日本学童記録2種目（濱口 敬 50mBa 27.86 / 100mBa 59.78）
- 個人種目 優勝40種目・2位14種目・3位9種目＝メダル数63個
- リレー種目 優勝 3種目（男子MR・FR、女子FR）＝3種目×4＝12個
- 大会新記録15種目・大会タイ記録1種目
- ベストタイム数 58/147

トピックス① 田村仁人13歳バースデー



トピックス② 日本学童記録2種目樹立（50m背泳ぎ・100m背泳ぎ）濱口 敬



トピックス③ 日本人選手と合同記念写真（近畿大学社会人チーム・パラ日本代表）



12月17日（土）

長いようで短かった本遠征も帰国の途に就く。昨晩は別れを惜しみ、選手たちは遅くまで起きていた様子。大会の疲れと睡眠不足で機内ではぐっすりと寝ていました。しかしこの後、帰国の飛行機が遅延し、日本国内で延泊となるのです。そして次の日の国内移動では東海道新幹線が止まり5時間缶詰されることになるのですが、それを知る由はありません・・・。



終りに



今回の遠征はコロナ禍の中で行われ、陽性者が出たら大会の参加や帰国が危ぶまれるため、まずは無事に健康で戻って来られたことにホッとしております。この遠征の総評としては、選手全員が短い期間でインターナショナルな感覚を身につけた競技者になれたように思います。練習時のレーン周回の向きが違うことから始まり、レース終了後に選手同士が交わす『握手』『グッドジョブ』『ハイタッチ』『ハグ』等、始めこそ戸惑っていましたが、徐々に自然と体現出来ていました。また、海外トップレベルの選手のレースへの向き合い方を間近で見て、日本国内の競技者との違いを勉強したようです。本遠征の目的であるジュニア選手達が「見聞を広め、チームの役割を果たし、様々な海外経験を得る」という目的は果たせていると感じました。ある参加選手の作文の中に『これからも人に感謝して水泳を続けたいと思います』の一文がありました。過去の遠征参加者にはオリンピック・日本代表選手・日本選手権参加者が多数います。今回参加した選手も人に感謝し、自分を高めていってほしいものです。そしていつの日かより大きな舞台で彼ら・彼女らが活躍することを祈っております。